英文の理解に繋がる受容語彙を増やす単元構想
－中学校外国語教科書にみる動詞の分析を通して－

豊後大野市立三重中学校　丸山　陽子

要旨
本研究では，来年度使用される教科書の動詞を分析し，その結果を踏まえた単元構想の作成を提案する。「読むこと」を中心とした学習活動を行う単元の中で，系統的で継続的な語彙指導を位置付ける。また，どのような語彙指導を行う必要があるか視点を明らかにし，学習指導の改善に役立てようとするものである。
＜キーワード＞　受容語彙　　教科書分析　　語彙指導　　単元構想

Ⅰ　研究の背景と目的

1　背景

(1)　現状

本校２年生の大分県学力定着状況調査では，調査対象となった３つの領域の全てにおいて，県の平均値を下回る結果であった。特に A 層と D 層の平均正答率の差を見てみると，「書くこと」の領域での差がもっとも大きいという現状がある。

＜資料 1-①＞ 大分県学力定着状況調査 領域別平均正答率(%)

領域	聞くこと	読むこと	書くこと
大分県	７１．６	５８．５	５０．８
三重中学校	６３．６	５１．５	４３．３
A 層	８６．３	７４．９	７８．９
B 層	６８．３	５５．０	５３．１
C 層	５７．６	３９．４	２５．１
D 層	３９．１	２９．８	１０．２

問題分析と生徒の誤答分析を行った結果，次の４つの問題点が分かった。一つ目は，単語を正しく綴れないこと，二つ目は，語順が定着していないこと三つ目は，英文から情報を正しく読み取ることができないこと，そして四つ目は，対話の流れに合わせて文を書く問題で無回答が多かったということであった。また，大分県学力定着状況調査の質問紙調査における辞書の活用について「分からない言葉が出てきたときは，辞書などを引いて調べていますか」という質問に対し，D 層の生徒のほぼ半数が，ほとんど調べないと答えている。

＜資料１-②＞ 大分県学力定着状況調査中学２年生４層クロス資料

78) 分からない言葉が出てきたときは，辞書などを引いて調べていますか。				
	１．学校でも家でも調べている	２．家では調べている	３．学校では調べている	４．ほとんど調べない
A層	１３．１	６２．４	６．４	１７．９
B層	９．８	５４．６	１１．０	２４．６
C層	７．６	４５．９	１３．３	３３．０
D層	６．４	３６．８	１５．６	４０．７

令和３年度全面実施の中学校新学習指導要領解説の中では，語彙指導について「英語の音声や語彙，表記，文法の知識を五つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習を図ること」（注１）と示され，語彙指導は領域を統合した言語活動を通して行うものとしている。領域を統合した言語活動の内容や生徒の習熟の程度を踏まえて，語彙習得の時期や段階を考慮した指導をしていくことが求められている。

(2)　課題

現状を踏まえ，単元構想をもとに語彙指導を行い，生徒の受容語彙を増やすことにより，英語の文章を理解し，理解した内容をふまえて，自分の考えや感想をもつことができる生徒を育成することを課題とする。

(3)　先行研究

眞野・鈴江(2018)が現行の教科書の動詞出現頻度調査を行った研究の中で「動詞の出現頻度は，教科書ごとに偏りがあり，必ずしも必要とされる基本的な動詞全てが教科書で導入されていない点を教師は意識する必要がある」（注２）と指摘している。またこの研究から，教科書によって生徒が学習する語彙そのものにもばらつきがあることが分かっている。村岡(2010) も「語彙学習を学習者任せにしてしまったら，必要な語彙を習得するのは難しくなってくる。だからこそ，適切な時期に，適切な量の，そして適切なレベルの語彙を指導者が十分に与えていくことが必要である。」（注３）と述べており，教師が系統的な語彙指導を位置づけて，指導を行う必要があることが分かる。

語彙指導の方法については，中田(2020)が「語彙の『付随的学習』とは，語彙習得が主目的ではない活動の中で，偶発的に語彙が習得されること」（注４）と述べており，その付随的学習を高めるためには２つの方法があると提唱している。「１つ目は，同じ英文テキストを複

数回読むこと，文脈から自然に単語を習得するには，同じ単語に複数回接することが必要である。２つ目は，意図的学習と組み合わせること。英文テキストに出てきた単語を辞書で調べることでより多くの語彙が習得される。」と述べている。

Milton and Treffers-Daller(2007)は，学習者の語彙知識を「広さ」,「深さ」,「流暢さ」に分類している。「広さ」とは，英単語集で丸暗記をするような，知っている単語の数のようなものを示し,「深さ」とは，ある語についてさまざまな観点の知識をもっていること,「流暢さ」は語彙を早く処理することだと言う(注５)。

Nation(2001)は，単語を知っているとは，単に単語の綴りを見て，意味がわかるということだけではなく，語形・意味・使用といったさまざまな側面からその語を知っていることを指す(注６)と指摘している。また，Quin(2002)は,「語彙知識の広さと深さから読解力を説明できる割合は，約３分の２であること」(注７)を指摘しており,「広さ」だけを教えていても生徒の読解力にはつながらないことが分かる。さらに，卯城(2009)は「英語読解において語彙知識が占める割合は大きく，学習した単語が増えるにつれ，断片的な語彙情報から英文全体の意味が類推できることが多くなる。１つの意味だけでなく，複数の意味を知っていること，つまりある単語について『深く』知っていることが読解につながる」(注８)と述べている。

野呂(2003)は，生徒の語彙知識の「広さ」や「深さ」を深める語彙学習について，辞書を活用した意図的な語彙指導や文脈を推測させる偶発的な語彙学習によって深めることができると提案している(注９)。

２　目的

様々な語彙の中でも動詞は，英語の文の構造を決定する大切な役割があり，動詞の習得は，生徒の英語力を向上させるために必要不可欠な要素である。そこで，教科書に出現する動詞の分析を行い，その分析結果を踏まえて，どんな語彙指導を行う必要があるか視点を明らかにし，単元構想を行うことを目的とする。

Ⅱ　仮説

仮説を「教師が意図的な語彙指導を行うための学習活動と，語彙の頻度や親密度を高めるための言語活動を単元構想に位置づけることにより，生徒は受容語彙を増やし，英文を理解し，理解した内容をふまえて自分の考えや感想をもつことができるだろう。」と設定した。

Ⅲ　方法

１　実態調査

所属校２年生 143 名に以下の調査を６月に実施した。この調査から，生徒の現状を把握し，単元構想を行うための根拠とする。

＜資料２＞　実態調査について

調査	調査内容	調査で明らかにしたいこと	参考にした先行研究
アイ	生徒の意識について【英語学習における意欲】	英語授業や学習に対する生徒自身の目標や動機づけ	
ウ	生徒の意識について【英語学習における困り】	生徒が苦手意識をもっている学習活動	
エ	基本動詞の知識について【目標語(30 の基本動詞)と日本語を結びつける】	目標語の理解	望月(1998)「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」
オ	基本動詞の知識について【文脈に合う英文になるように，目標語の綴りを選択肢から選ぶ】	目標語の理解	Nation(1990) N.Schmitt,D.Schimitt&Clapham(2001)”Vocabulary Levels Test”
カ	基本動詞の知識について【文脈に合う英文になるように，最初の文字に続けて目標語を綴る】	目標語の理解	Laufer and Nation (1999) “Productive Vocabulary Levels Test”
キ	基本動詞の知識について【基本動詞を含む英文を読み，内容語として理解している】	目標語の理解	卯城祐司(2009)「リーディングの科学」

２　教科書における動詞の分析

(1)　「中学生用動詞語彙」との比較

眞野・鈴江(2018)は,「中学生用動詞語彙」の抽出を行っている。その抽出にあたっては,「大学英語教育学会基本語リスト新 JACET8000」(注 10)を参考にしている。このリストは，中学・高校の検定教科書,高校・大学入試，TOEFL，TOEIC，英検などで使用される語彙と，コーパスから得られた英語母語話者の使用する語彙とを分析し順位付けしたものであり，その中に「中学・高校コミュニケーション支援語彙リスト」として 1245 語が示されている。眞野・鈴江は，その中から 185 語の動詞を抜き出し,「中学生用動詞語彙」とした。

今回は，各教科書の中に「中学生用動詞語彙」上位

30 位内の動詞が，どのぐらいの頻度で出現するかを調査し，眞野・鈴江が調査した際のデータと比較する。

(2) 先行研究との比較

眞野・鈴江の(2018)「中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題」の中から，次の３項目で比較を行う。

① 教科書に出現した全動詞の延べ語数と異なり語数
② 各教科書における高頻度動詞の比較
③ 使用頻度一回のみの動詞とその割合

３　単元構想の作成

実態調査と教科書における動詞分析の結果を踏まえ，単元構想を行う。特に Saragi,Nation,and Meister(1978)は，ある語に６回以上繰り返し出会うと学習が進むと述べている。また，Zahar,Cobb and Spada(2001)は，学習者が正答した語の使用頻度の平均は８回で，正答しなかった語の平均は 2.75 回であったという研究をしている。このことから，繰り返しの単語学習には効果があり，さらに，６回以上同じ単語に触れるとその語を学習できている可能性が高いと結論づけていることを参考に，来年度豊後大野市で使用予定の教科書について，出現する頻度が５回以下の動詞の頻度と親密度が高まるよう，単元構想には次の項目を位置づける。

① 生徒の実態把握
② 学年ごとの到達目標
③ 単元の目標
④ めあて・振り返りの設定
⑤ 言語活動の設定

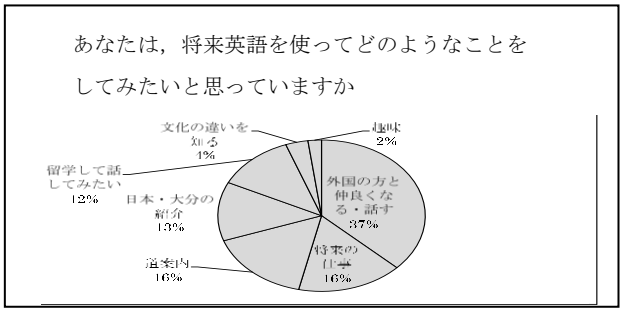
Ⅳ　結果

１　実態調査から明らかになった生徒の実態

令和２年６月から８月に豊後大野市立三重中学校２年生 143 名を対象にして，実態調査を行った。

(1) 生徒の英語学習に対する意欲と困り

＜資料３-①＞ 実態調査アの結果



資料３-①では，「外国の方と仲良くなる・話す」，「留学して話してみたい」と回答した生徒の合計が約５割いる。このように回答した生徒は，英語を話すことによって人とコミュニケーションをとりたいという思いをもっている。また，「道案内」，「日本・大分を紹介」と回答した生徒は，人とコミュニケーションをとる中で，相手の役に立ったり，ふるさとを発信したりしたいという具体的な目的をもっていることが分かる。

一方，「将来の仕事」，「文化の違いを知る」，「趣味」と回答した生徒は，自分自身の興味・関心にしたがって，英語を勉強することにより，得られるものがあるのではないかと感じていることが分かる。

＜資料３-②＞ 実態調査イ，ウの結果

質問項目	語彙知識に関すること　(人)	理解に関すること　(人)	表現に関すること　(人)
頑張りたいことは何ですか	単語を覚える(48) 単語が書ける(16)	英文を読んで理解する(7)	教科書の音読(23) 英文を書くこと(21) 英語を話す(16)
困っていることは何ですか	単語を綴る(76) 単語の意味(44)	教科書の内容理解(41) 質問に答える内容(56)	英語で自分の考えを書く(84) 質問の答え方(75) 教科書の音読(34)

資料３-②より，英語学習の目標では，多くの生徒が語彙の習得に取り組んでいきたいと考えていることが分かった。

また，生徒が最も英語学習で困りを感じていることは，表現に関することの中でも「英語で自分の考えを書く」ことである。次に，語彙知識に関することである。特に 143 人中 120 人が語彙の習得に困りを感じていることが分かった。

(2) 基本動詞の知識についての調査結果

＜資料４-①＞ 実態調査エ～カの結果

	A 層	B 層	C 層	D 層
調査エ	97.6%	92.0%	85.3%	55.3%
調査オ	92.6%	86.0%	72.3%	32.3%
調査カ	90.6%	58.6%	39.3%	14.0%

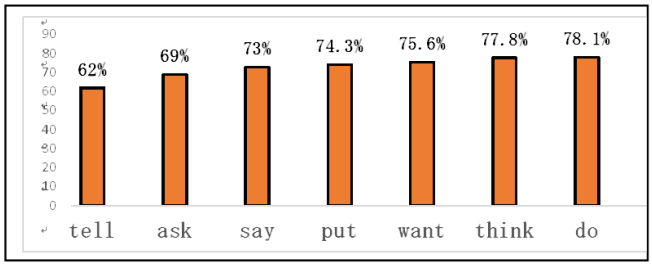
資料 4-①より，調査エの結果をみると，D 層の半数以上の生徒が，単語を見てその意味やイメージが思い浮かばない状況が見える。また調査オの結果から，D 層の生徒の３分の２が，選択肢の中から文脈に合う英単語を選び空欄補充することができないことが分かった。さらに調査カは，調査オから選択肢を外し，最初の文字のみを与えて綴らせるものであったが，結果をみると調査オ以上に生徒の困りが大き

いことが分かった。

また，D 層の生徒の躓きの段階を知るために，調査エ～オの結果を比較すると，調査オで C 層と D 層の生徒に大きな開きがあることが分かる。このことから，単語そのものの意味やイメージが理解できている生徒でも，その単語が文中に現れると英文全体の表すものを捉えることができない状態にあることが分かった。

次に，調査で用いた基本動詞 30 の中で調査エ～カにおいて平均正答率の低かった動詞を資料４-②に示した。

＜資料４-②＞ 実態調査エ～カの調査結果の平均正答率



そこでこれらの動詞を用いて問題文(物語文)を作成し，調査キを実施した。調査キでは，生徒の正答率が低かった動詞を，文脈の中で内容語として理解できているかを知るために，問題文の内容に関する事実発問や推論発問を行った。結果としては，tell は 62%→21.6%に下がり，put は 74.3%→49.3%に下がった。調査キの結果より，単語だけの調査で平均正答率の低い語は，文章の中で内容語としても理解することが難しい状況であることが判明した。

２　教科書分析における先行研究との比較

(1)　４社の教科書における動詞の分析

眞野・鈴江(2018)の研究では，中学校英語検定教科書で使用される語彙の指導について，現状と課題が整理されている。

現状としては，①どのような語彙がその教科書で使用されるかについて，教科書巻末のリストから把握することができる②教科書で使用される語彙の選択については教科書会社に任されている③学習者は初級レベルであり，繰り返しどのぐらいその後に出会うかが語彙の習得に大きく影響する，の三点が示された。

課題としては，①どのような語彙をどのくらい学ぶべきかについての共通理解を図ること②どの語がどのような意味で，どのぐらいの頻度で使用されているのかということについて，情報を提供していくこと③非常に頻度の低い語彙については，その頻度を上げるため，授業内で何らかの対策が必要となる，ということが示されている。

そこで，本項では，特に課題の②，③に着目し，R３年度より使用される以下の４社の中学校英語検定教科書(合計 12 冊)を対象に調査を行った。

(教科書名は括弧内の略称を使用。)

【対象教科書】

開隆堂　　Sunshine English Course１－３(SS)
三省堂　　New Crown English Series１－３(NC)
東京書籍　New Horizon English Course１－３(NH)
光村図書　Here We Go English Course１－３(HWG)

【調査範囲】

教科書 / 学年	SS	NC	NH	HWG
1	pp.21-130	pp.15-147	pp.10-126	pp.28-134
2	pp.7-124	pp.8-125	pp.7-125	pp.9-136
3	pp.7-118	pp.8-129	pp.7-113	pp.9-120

【調査方法】

教科書における動詞の頻度を先行研究と同じ方法で調査するため以下にその基準を示す。

① 完全文の中に生じた動詞。
② 日本語での説明部分に含まれている完全文。
③ 動詞の過去分詞形，現在分詞形の修飾用法，形容詞化しているもの。
④ 句や穴埋めなどの不完全文や非文としての例文は調査対象としない。
⑤ 歌の歌詞は，調査対象としない。
⑥ 助動詞的な役割の be(受け身・進行形),have(完了形)，do(疑問文・否定文)，be going to のような成句に含まれ，主動詞として働いていない動詞は調査対象としない。
⑦ be 動詞(be,am,is,are,been)は be として数える。

調査結果から分かった動詞の出現結果は以下の資料５-①にまとめた。異なり語数は，動詞の活用形を全て含み(例：eat,eats,ate,eaten,eating,to eat)，１語としている。全教科書における動詞の延べ語数は，約 3000～4000 語の間であり，平均延べ語数は 3426.5 語であった。

＜資料５-①＞　全動詞の延べ語数と異なり語数

教科書	SS	NC	NH	HWG
延べ語数(H28 年度)	3452	3488	3297	3167
延べ語数(R3 年度)	3011	3526	3991	3178
異なり語数(レマ)H28 年度	226	252	242	231
異なり語数(レマ)R3 年度	265	338	291	277

教科書に出現した全動詞の延べ語数と異なり語数の比較では，R３年度使用教科書の NH が延べ語数 694 語と約 700 語近い増え方が目立つ。異なり語数は，H28 年度の教科書 218～252 語の範囲であり，平均が 232.3 語であった。R３年度の教科書では，NC の異なり語数が 265～338 語の範囲であり，平均は，292.8 語で，H28 年度に比べると 86 語と増えている。学習指導要領での語彙数 1600～1800 語からみると約５分の１程度が動詞で占められている。

次に，R３年度使用教科書に出現する高頻度の動詞を資料５-②にまとめた(網掛けした部分は，調査エ～オにおいて正答率の低かった動詞)。

＜資料５-②＞ R３年度使用教科書における高頻度動詞

(上位 30 位)

SS(new.ver.)				NC(new.ver.)				NH(new.ver.)				HWG(new.ver.)			
	verb	freq.	%		verb	freq.	%		verb	freq.	%		verb	freq.	%
1	be	856	28.40%	1	be	926	26.26%	1	be	1010	25.30%	1	be	878	27.62%
2	have	107	3.55%	2	have	152	4.31%	2	have	165	4.13%	2	have	126	3.96%
3	go	80	2.66%	3	like	110	3.11%	3	want	127	3.18%	3	go	97	3.05%
4	play	77	2.56%	4	play	93	1.10%	4	like	123	3.08%	4	want	94	2.95%
5	like	73	2.42%	5	see	79	2.24%	5	go	97	2.43%	5	do	93	2.92%
6	do	70	2.32%	6	want	73	2.07%	6	see	95	2.38%	6	play	82	2.58%
7	know	68	2.26%	7	use	68	1.92%	7	do	92	2.30%	7	like	75	2.35%
8	see	67	2.22%	8	do	64	1.81%	8	use	87	2.17%	8	know	59	1.85%
9	make	66	2.19%	8	make	64	1.81%	9	play	74	1.85%	9	think	58	1.82%
10	think	56	1.86%	10	say	57	1.61%	10	make	73	1.82%	10	make	57	1.79%
11	want	55	1.82%	11	think	54	1.53%	10	know	73	1.82%	11	see	56	1.76%
12	look	44	1.46%	12	write	50	1.41%	12	look	59	1.47%	12	learn	46	1.44%
13	eat	42	1.39%	13	look	47	1.33%	13	get	56	1.41%	13	use	44	1.38%
14	use	41	1.36%	14	get	44	1.24%	14	come	55	1.37%	14	help	41	1.29%
15	get	37	1.22%	15	go	43	1.21%	15	think	54	1.35%	15	take	37	1.16%
16	enjoy	36	1.19%	16	know	42	1.19%	16	live	47	1.17%	15	come	37	1.16%
17	let	35	1.16%	17	come	38	1.07%	17	help	43	1.07%	17	say	33	1.03%
18	take	34	1.12%	17	enjoy	38	1.07%	18	eat	42	1.05%	18	look	32	1.00%
19	tell	31	1.03%	19	take	32	0.90%	19	thank	40	1.00%	19	eat	29	0.91%
20	watch	29	0.96%	19	visit	32	0.90%	20	take	39	0.97%	20	let	28	0.88%
21	say	28	0.93%	21	read	28	0.79%	21	say	38	0.95%	21	get	27	0.84%
21	thank	28	0.93%	22	let	27	0.76%	22	write	35	0.87%	21	visit	27	0.84%
21	read	28	0.93%	23	learn	26	0.73%	22	need	35	0.87%	21	thank	27	0.84%
24	come	27	0.89%	23	live	26	0.73%	22	speak	35	0.87%	21	study	27	0.84%
25	live	25	0.83%	23	thnak	26	0.73%	25	learn	33	0.82%	25	leave	24	0.75%
26	run	23	0.76%	26	give	25	0.70%	26	visit	30	0.75%	26	enjoy	23	0.72%
27	write	21	0.69%	26	need	25	0.70%	26	watch	30	0.75%	26	watch	23	0.72%
28	cook	19	0.63%	28	eat	24	0.68%	26	enjoy	30	0.75%	28	talk	22	0.69%
28	help	19	0.63%	29	work	22	0.62%	29	practice	29	0.72%	29	need	21	0.66%
28	learn	19	0.63%	30	buy	21	0.59%	30	let	28	0.70%	29	work	21	0.66%
29	call	18	0.59%	30	speak	21	0.59%	合計			69.37%	30	write	19	0.59%
30	study	17	0.56%	30	put	21	0.59%			3991		30	try	19	0.59%
合計			72.15%	合計			66.30%					合計			71.64%
		3011				3526								3178	

資料５-②から分かるように，上位 10 位の動詞が全動詞の約５割を占めていることが分かる。上位 30 位の語は，教科書に出現する全動詞の約７割を占めている。これは 28 年度の教科書について調査した先行研究でも同じ結果であった。

また，資料５-②から網掛けした動詞のうち，教科書の上位 30 位の高頻度語に入っているものが，４，５個であった。

次に，実態調査で出題した基本動詞 30 のうち，生徒の正答率が７割以下の動詞７個が H28 年度の教科書と R３年度の教科書の中では，どれぐらいの頻度で出ているか比較をした。

＜資料５-③＞ 正答率が低い動詞の教科書内の頻度の比較

	SS H28	SS R3	NC H28	NC R3	NH H28	NH R3	C H28	HWG R3
tell	17	32	22	16	20	26	14	23
ask	24	10	18	17	14	19	15	11
say	36	18	35	57	34	38	54	33
put	7	3	8	21	6	12	4	7
want	54	55	81	73	81	127	77	94
think	59	56	40	54	56	54	56	58
do	85	70	55	64	49	92	68	93

＜資料５-④＞ 教科書に一回のみ出現する動詞数とその割合

教科書	SS	NC	NH	HWG
H28 年教科書の動詞	62	85	62	66
R3 年教科書の動詞	100	123	84	77
異なり語数に占める割合(H28)	27.4%	33.7%	25.6%	28.1%
異なり語数に占める割合(R3)	37.7%	36.3%	28.8%	27.7%

教科書に一回のみ出現する動詞の数は，各教科書会社ともにかなりの数存在している。H28 年度使用教科書では平均 28.7%であるのに対して，R３年度の使用予定の教科書では，平均 32.7%であった。

(2) 「中学生用動詞語彙」との比較

＜資料６＞ R３年度教科書上位 30 位内の動詞と教科書内での順位(頻度)

順位	中学生用動詞語彙	新JS内順位	SS	NC	NH	HWG
1	be	9	1(856)	1(926)	1(1010)	1(878)
2	have	17	2(107)	2(152)	2(165)	2(126)
3	do	27	6(70)	8(64)	7(92)	5(93)
4	say	37	21(28)	10(57)	21(38)	17(33)
5	know	52	7(68)	16(42)	10(73)	8(59)
6	like	64	5(73)	3(110)	4(123)	7(75)
7	think	65	10(56)	11(54)	15(54)	9(58)
8	get	67	15(37)	14(44)	13(56)	21(27)
9	see	74	8(67)	5(79)	6(95)	11(56)
10	go	79	3(80)	15(43)	5(97)	3(97)
11	make	94	9(66)	8(64)	10(73)	10(57)
12	want	100	11(55)	6(73)	3(127)	4(94)
13	take	104	18(34)	19(32)	20(39)	15(37)
14	come	115	24(28)	17(38)	14(55)	15(37)
15	mean	136	98(3)	59(7)	46(14)	70(6)
16	look	137	12(44)	13(47)	12(59)	18(32)
17	give	150	31(18)	26(25)	31(27)	32(18)
18	find	151	38(17)	45(14)	31(22)	32(18)
19	need	160	48(9)	26(25)	22(35)	29(21)
20	tell	166	19(32)	49(16)	24(26)	26(23)
21	put	175	98(3)	30(21)	40(12)	73(7)
22	keep	199	67(6)	63(8)	43(13)	54(11)
23	use	203	14(41)	7(68)	8(87)	13(44)
24	help	215	28(19)	52(17)	17(43)	14(41)
25	let	216	17(35)	27(35)	22(35)	20(28)
26	feel	219	165(1)	85(5)	34(20)	35(16)
27	believe	250	67(6)	98(3)	214(2)	98(4)
28	call	253	31(18)	41(11)	46(14)	50(10)
29	ask	254	55(10)	52(17)	33(19)	54(11)
30	try	255	70(7)	41(11)	29(24)	30(19)

各教科書で使用頻度が 30 位より下の順位である語に色づけをしている。頻度５回以下の語には濃く色づけをした。15 位以降の動詞に色づいているのが目立つ。新 JACET8000 において中学生に必要な語彙として重視されている動詞が，教科書の中では使用頻度が低いのが分かる。これは H28 年度の教科書についても調査した先行研究とほぼ同じ結果であった。

３　単元構想をするための視点

【先行研究】　・意図的学習と付随的学習を組み合わせる
・語彙知識には「広さ」「深さ」「流暢さ」がある
・英文読解には，「深さ」が関係している
【実態調査】　・英語を使ったコミュニケーションをしたい
・単語を理解していても文中に現れる英文全体を捉えることに躓き
【教科書分析】・教科書に出現する頻度の低い語を意図的に扱う
・基本動詞 30 語を定着するための手立てが必要

⇩

【単元構想をするための視点】
・生徒が授業の中で意図的な学習と付随的な学習を行えるか
・出現頻度の低い語にどう出合わせるか

⇩

語彙の親密度を高めるための４つの過程
（Melka 1997 を参考）

第 １段階:導入 文字・音声・意味へのアプローチ
第 ２段階:定着 反復・再生・使用を行い，リーディングやリスニングで受容語彙として使用できる状態
第 ３段階:再生 ある程度のヒントがあれば単語が使える状態
第 ４段階:発展 ライティングやスピーキングで必要に応じて発信語彙として自由に使える状態

【A:語彙の頻度・親密度を高める言語活動】

導入 新出語彙指導
①絵を見て音声と意味の確認後発音練習や空書き練習
定着 語彙の広さ・深さ
②英文を読んだ後，内容に関する発問をして，内容理解し，お互いの考えを交流する活動
③内容理解後，自分の感想を加えて，登場人物になりきって音読活動

受容語彙：読む・聞く
*受容語彙とは，単語を聞いたり読んだりしたときにその意味が理解できる語彙

再生 語彙の深さ
④聞いた内容を自分の言葉で表現する活動（リテリング）
発展 語彙の運用
⑤スピーチ後，Q&A をする
⑥読んだ内容をまとめる

発信語彙：話す・書く
*発信語彙とは，伝えたい意味を適切な発音で綴り表現できる語彙

＋

【B:意図的な語彙指導】繰り返す期間（３年間）繰り返しの回数（６回以上）
①単語シート（品詞別に作成）
②単語の意味やイメージを表すイラストの活用
③辞書指導
④出現頻度の低い語を年間指導計画に入れて，授業で意図的に扱う
⑤音読活動による語彙・文法の内在化

「読むこと」の領域で，卯城(2009)は語彙知識を関連付け，英文理解に繋げるために，ある単語を一つの意味だけでなく，複数の意味を知っていることが読解に繋がると述べている。そこで語彙知識の「深さ」に焦点を当て，さまざまな語彙指導を組み合わせて単元構想を作成する。

Ⅴ　考察

１ 生徒の英語学習に対する意欲と語彙知識について

多くの生徒が「外国の方と仲良くなる・話す」といった英語を使ったコミュニケーションを望んでいる。彼らの思いや興味・関心に合わせて言語活動を設定し，英語を使わせることができるような語彙指導を繰り返すことにより，実際のコミュニケーションの育成に繋がっていくのではないかと考える。

また，多くの生徒が「英語で自分の考えを書く」ことに困りを抱えている。習得している語彙が少ないということや頭の中にある自分の考えをどんな英語表現として表せばよいのか分からない等が原因として考えられる。このことは，生徒の語彙知識調査の結果からも生徒が語彙の習得で躓きがあることと関係していると言える。語彙の習得の段階で躓きがあることにより，語彙が少なくなっている生徒や，どのような英語で自分の考えを表現すればいいのか分からない生徒の語彙の習得に何らかの手立てが必要であることが言える。特に D 層の生徒は，単語をみてその意味やイメージが思い浮かばない状況があることから，単元構想を行う際に，どうすれば単語の意味やイメージがその語と結びつくようになるのかを考えていく必要がある。

２　教科書分析における先行研究との比較

教科書の出現頻度が 15 位までの動詞は，先行研究で使用された「中学生用動詞語彙」の上位 30 位までに含まれている。しかし，16 位以降の動詞は，ほとんど含まれていない。

また，教科書に出現する全動詞のうち，３割～４割程度は，教科書に一回だけしか出現しない。このような動詞は，学習者にとって定着が難しいといえる。

さらに実態調査で平均正答率の低い動詞は，出現頻度が 10 回以上であっても定着していない。

これらの教科書で使用される動詞についても頻度や親密度を高めていくための 3 年間を見通した指導が必要なのではないかと考える。

3　生徒の実態調査と教科書分析の結果をもとにした単元構想

(1) 英文の理解に繋がる受容語彙を増やすための単元構想

①生徒の実態を把握する

大分や日本の文化を紹介したい，語彙の習得に困りがある

⇩

②学年ごとの到達目標

説明文や物語文を読み，それに関連するテーマについて，説明・紹介するための文を英文で書くことができる

⇩

③単元の目標

大分の偉人について関係代名詞を用いて，説明することができる。
- 関係代名詞目的格について理解し，やり取りの中で適切に使っている。(知識・技能)
- 聞き手に伝わるように，物語文を読んで，自分の考え， 気持ちなどを簡単な語句を用いて述べ合っている。 (思考・判断・表現)
- 聞き手に伝わるように，物語文を読んで，自分の考え，気持ちなどを簡単な語句を用いて述べ合おうとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)

⇩

④めあての設定

「大分の偉人についてみんなに紹介しよう」

⇩

⑤言語活動の設定＊太字は「読むこと」を中心とした言語活動

- 帯活動で基本動詞を使った Q&A や small talk，本文のリテリング
- 世界の偉人を紹介する英文を聞き，聞き取った内容をもとに，ペアで質問し合う活動
- **教科書の本文を読んだ後，内容に関する発問(事実・推論・評価)を行い，理解した内容を踏まえ，お互いの考えを交流する活動**
- **教科書の本文の内容理解後，自分の感想を加え，登場人物の気持ちが伝わるような音読活動**
- **目標語を用いて，自分の気持ちや考えを書き，読み合う活動**

(2) 教科書に出現する５回以下の語彙

1年	単語	意味	レッスン	頻度
発信	stay	滞在する	L1	4
発信	cut	切る	L2	2
発信	climb	登る	L2	2
受容	jump	ジャンプする	L2	3
発信	leave	去る	L3	2
発信	guess	推測する	L3	3
受容	dress	衣服を着る	L4	1
発信	drive	運転する	L4	1
発信	hold	持つ	L5	3
発信	touch	触る	L5	2
発信	turn	まわる	L6	5
発信	wash	洗う	L7	4
受容	respect	尊敬する	L7	5
発信	sleep	眠る	L7	2
発信	fall	落ちる	L8	2
発信	drop	落とす	L8	3
発信	hit	打つ	L8	2
受容	increase	増える	L8	2
発信	share	共有する	L8	4

2年	単語	意味	レッスン	頻度
発信	catch	捕まえる	L1	5
受容	shout	叫ぶ	L1	3
発信	wonder	～かしらと思う	L2	2
受容	travel	旅行する	L2	4
発信	win	勝つ	L2	4
発信	worry	心配する	L3	2
発信	fish	釣る	L3	2
受容	return	戻る	L3	2
受容	vote	投票する	L3	1
発信	act	演じる	L4	3
発信	believe	信じる	L4	3
発信	check	チェックする	L4	2
発信	feel	感じる	L4	5
発信	name	名づける	L5	3
発信	answer	答える	L5	2
発信	offer	提供する	L5	1
受容	count	数える	L7	3
発信	notice	気付く	L7	2
受容	laugh	笑う	L7	1
受容	spread	広げる	L7	2

3年	単語	意味	レッスン	頻度
発信	move	動く	L1	2
発信	rain	雨がふる	L1	3
受容	rest	休む	L1	1
発信	trust	信頼する	L1	1
受容	support	支える	L1	3
受容	press	押す	L2	1
発信	record	記録する	L2	2
発信	rule	支配する	L2	1
受容	damage	ダメージを与える	L3	1
発信	doubt	疑う	L3	1
発信	test	テストする	L3	3
受容	attack	攻撃する	L4	3
受容	break	壊す	L4	1
発信	cover	覆う	L4	1
受容	contact	連絡をとる	L4	1
受容	promise	約束する	L4	3
発信	shop	買い物をする	L4	3
受容	step	踏む	L4	1
発信	base	～を基礎とする	L4	1
発信	fight	戦う	L5	1
受容	judge	判断する	L5	2
発信	ride	乗る	L5	1
発信	reach	届く	L6	2
発信	figure	思う	L7	1
発信	produce	作り出す	L7	1
受容	stick	突き刺す	L7	1

(4)の単元計画の中で，これらの語彙を扱う時間に★を付している

(3) 構想する単元

単元名	『Lesson 5 I Have a Dream』第３学年 全10時間計画
単元の目標	大分の偉人について関係代名詞を用いて，説明することができる

(4) 単元計画

＊Ｐ１３の「Ａ語彙の頻度・親密度を高める言語活動・Ｂ意図的な語彙指導」より

【生徒の実態】
単語が綴れない
語順が定着してない
英文の内容理解ができていない
英作文で無回答が多い

【指導の分類】
意図的語彙指導…○
語彙の頻度や親密度を高める言語活動…□

【語彙指導内容】
A①:新出語彙の指導(導入)　B①:単語シートによる指導
A②:内容に関する Q&A(定着)　B②:単語のイメージと音声の指導
A③:リテリング(再生)　B③:辞書指導
A④:スピーチ(発展)　B④:出現頻度の低い語彙の指導
ライティング　B⑤:音読活動による語彙の定着

受容語彙を増やし英文理解へ繋がる言語活動を通した語彙指導

時間	語彙指導の分類	語彙指導の内容	学習内容
1 GET1	□○	A①	・基本動詞を使ったQ&A
	○	B①②	・写真や実物を使い新出語彙の学習
	□	A④	・関係代名詞の目的格を使って，自分のお気に入りの場所を説明する英文を書き，ペアで読み合う
2 GET1	□○	A①	・基本動詞を使った Q&A
	○	B① A②	・世界の偉人を紹介する英文を聞き，聞き取った内容をもとにペアで質問し合う ★
	□	A③	・本文の英文を読み，内容に関する発問に答え，理解した内容を踏まえ，お互いの考えを交流する
	□	B⑤	・本文の内容を理解し，自分の感想を加えて音読活動
	□	A④	・ペアで感想や考えを話し合う
3 GET2	□○	A①	・基本動詞を使った英文読解後，Q&A
	□	A③	・GET1 本文のリテリング
	○	A④	・ALT の好きな本や映画について紹介し，聞き取った内容をもとに「名詞＋主語＋動詞」の形を使い，読んだことある本や，見たことある映画について英文を書く ★
	□	A④	・書いた内容をグループ内で発表する
4 GET2	□○	A①	・基本動詞を使った英文読解後，Q&A
	○	A②	・世界の偉人を紹介する英文を聞き，聞き取った内容をもとにペアで質問し合う ★
	○	B③	・辞書をひく(give)→意味確認や，使い方を辞書でみる
	□	A③	・本文の英文を読み，内容に関する発問に答え，理解した内容を踏まえ，お互いの考えを交流する
	○	B⑤	・本文の内容を理解し，自分の感想を加えて音読活動
	□	A④	・ペアで感想や考えを話し合う
5 READ	□	A③	・GET2 本文のリテリング
	○	A①B②	・写真や実物を使い新出語彙の学習
	□	A②	・物語文を読み，その内容に関する Q&A をする
	□○	A②③	・ワークシートで内容理解を深める(物語の流れの確認)
	○	B④	・事実発問，推論発問に答え，内容理解し，自分の考えをお互いに交流する(fight,ride,judge の入った英文に注目し，何度も読み返すような事実発問をする) ★
6 READ	□	B①	・基本動詞を使った small talk
	○	A②	・世界の偉人を紹介する英文を聞き，聞き取った内容をもとにペアで質問し合う ★
	□	A④	・自分の考えを理由とともに交流し合う
	○	B⑤	・本文の内容を理解し，自分の感想を加えて音読
7 READ	□	B①	・基本動詞を使った small talk
	□○	A④	・キング牧師のスピーチを読み自分の考えを英語で書く
	○	B③	・気になる単語を書き出す(judge を例にする)
	○	B④	・辞書を活用しながら英文を作る(fight,ride を例にする) ★
8 project	□	B①	・基本動詞を使った samll talk
	○		・例文を見て，紹介したい偉人についてマッピングをする ★
	○	B③	・辞書を活用しながら，英文を作成し，書いた英文を交換して読み合う
9 project	□	B①	・基本動詞を使った small talk
	□	A②	・世界の偉人を紹介する英文を聞き，聞き取った内容をもとにペアで質問し合う ★
	□	A④	・書いたものをもとに大分の偉人を紹介する英文を発表し，聞いた内容について感想を書く
10			単元の振り返り(パフォーマンステスト)
	□	A③④	・与えられた情報からその人物の紹介文を書き，発表を行う

（5）教科書に出現する頻度が５回以下の動詞のうち Lesson５のめあてを達成するために出合わせたい語彙と例文

学年	頻度	単語	文
1	3	guess	Can you guess the person that I respect?
	2	touch	Dr,King's action touched my heart.
	5	respect	I respect the person who worked for the people.
2	2	wonder	I wonder why she refused to do so.
	3	believe	I believe people never forget his action.
	5	feel	I feel her action is great.
	1	offer	The woman offered to drive for the black people.
3	3	move	I was moved by his idea.
	3	support	We supported his action.

Ⅵ　研究のまとめ

１ 成果

本研究では，生徒の英語力を向上させるために必要不可欠な要素である動詞に着目し，来年度に使用する教科書４社の動詞の出現頻度の調査を行った。この調査結果をもとに，意図的な語彙指導と語彙の頻度や親密度を高めるための言語活動を単元構想に位置づけて作成した。今まで単発で行っていた語彙指導を単元の中に位置づけ，語彙指導の方向性が定まりつつある点は成果と言える。

また，今回どのような語彙指導が必要になってくるのか視点を明らかにしていく中で，意図的な語彙指導だけでなく，さまざまな語彙指導を組み合わせて行うことで，生徒の語彙知識の「深さ」が深められるのではないかということが分かってきた。今まで行っていた語彙指導では，生徒の語彙知識の「広さ」，つまり生徒の語彙量を増やすことを中心としていた。しかし，生徒の語彙知識の「深さ」を深めるためには，単語のさまざまな要素を指導していくことで，語彙知識が深まっていき，英文を理解することになるのではないかということが見えてきた。

今後は，調査した結果を自校や豊後大野市の英語部会に持ち帰り，今回作成した単元構想を実践しながら，生徒の受容語彙を増やし，英文を理解し，理解したことをもとに自分の考えや感想をもつことができる生徒の育成を図っていく。

２　課題

本研究では，動詞について調査を行ったが，動詞が教科書の中で他のどのような語彙と結びついているのか，また，調査できなかったその他の動詞についても今後時間をかけて調べていき，生徒の受容語彙を増やす手立てを考えていく必要がある。

今回，作成した単元構想をもとに生徒の受容語彙が増えているかどうかを検証することも求められる。今後，生徒の表現がどのようになっていれば受容語彙が増えたのか，さらに受容語彙が増えることで英文の理解に繋がっていくのかという点に関しても検証授業を行いながら実践していく必要がある。

本研究を通して，今まで系統的に行っていなかった語彙指導を見直す機会になり，また，「読むこと」の領域で指導方法を研究できたことは，今後の指導に役立つものとなった。この研修で学んだことを自校や豊後大野市の英語部会で還元し，これからも研鑽を重ねながら子どもたちの英語教育のために邁進していきたいと思う。

参考・引用文献

Saragi, Nation, & Meister, “Vocabulary learning and reading.”A General Service List of English Words. London: Longman. 1978

Zahar, Cobb & Spada “Effects of frequency and contextual richness.” The Canadian Modern Language Review, 57 2001

(注１)文部科学省　中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説　外国語編　p.29　平成 30 年

(注２)眞野美穂・鈴江涼子「中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題」鳴門教育大学研究紀要第 33 巻　p.303　2018

(注３)村岡亮子「中学校検定教科書で学習される語彙，学習されない語彙」『STEP BULLETIN』22 巻　p.189 2010

(注４) 中田達也「英単語学習の科学」研究社ｐ.27 2020

(注５) Milton,J.Vocabulary uptake from informal learning tasks. Language Learning Journal,36(2),227-238 2008

(注６) Nation,I.S.P Learning vocabulary in another language.Cambridge: Cambridge University Press. 2001

(注７) Qian,D Investigating the relationship between vocabulary knowledge and academic reading performance: An assessment perspective. Language Learning, 52 p.513-536. 2002

(注８) 卯城祐司『英語のリーディングの科学』研究社 p.8 2009

(注９) 野呂徳治 step 英語情報１・２月号　13 巻１号 p. 46-47 2010

(注 10) 眞野美穂・鈴江涼子「中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題」鳴門教育大学研究紀要第 33 巻　p.301　2018